

「物事の根源に立ち返る」

編集協力者
湯浅 龍彦

今年のNHK大河ドラマ「天地人」の主人公は、上杉景勝に仕えた直江兼続である。天地人を三才思想といい、東洋哲学での生命観を説いている。その心は、はるか宇宙創生の時、混沌の中から陰陽の2つの気が現れ、天の気と地の気の間から人間を含めたあらゆる生命体が生じたというところにある。戦国の世、すべてが留まることなく、激しく流転する時代にあって、人の世のはかなさを「愛」という理念で貫いた武将が兼続である。

さて、昨年から国家公務員という立場を離れ、かつて勤めた国立病院における医療のあり方を外から眺め考える機会を与えられた。内部から見えないことも外からであれば見えてくる。

今日の日本の医療はその根底から覆されるごとき大きな危機に曝^{さら}されている。その要因は多岐にわたるが、医師の偏在、少子高齢化、経済の破綻^{はたん}が大きな問題になっている。地方に行けば行くほど医師不足は顕著であるし、地方は完全に高齢社会になっている。その上、都市部での高齢化問題も深刻になりつつある。そして時代の大きなうねりに翻弄^{ほんろう}され悲鳴をあげている人々の中に難病患者たちもある。

このような難局を目前にして、国立病院群が全体としてどこへ向かおうとしているのか、国民目線からは、はっきりいってわかりにくい。そこで考えるべきことは、基本に立ち返ることである。そもそも国立病院はどう始まり何をしてきたのであろうか。いうまでもなく多くの国立病院（主体は国立療養所であるが）は、戦後、国民病である結核の撲滅を目標にして大なる成果をあげた。その後、筋ジストロフィー症や神経難病など、他の一般医療機関では診療の難しい、難治な病態を抱えた患者、治療法の

いまだ明らかでない難病を対象として運営されてきた。国を挙げて当たらなければならない医療の課題に真正面から立ち向かってきたのである。そしてこのことが国立病院群に求められる基本的な資質である。では、翻って今はどうであろうか、国立病院群の果たすべき役割は何なのかを考えてみたい。

第一に、心すべきことは根源に立ち返り、国の土台にかかわる医療政策（医療の質の確保、人材の育成、新たな医療産業の創生）に力を結集しなければならない。そのために国立病院群が一丸となって、将来ビジョンを策定すべきである。ナショナルセンターと（旧）国立病院と（旧）国立療養所によってそれぞれ目指す所は多少違うのであろうが、いずれにしても国を守る、国民の命を守る気概を前面に出してほしい。そして他の医療機関では行い得ない、将来の日本に役立つ医療システムの再構築と土台づくりを目指すべきである。その中には当然高度先進医療、総合医療、難病医療が含まれるべきである。これを実行するためには国立ブランドとしての旗幟^{きし}を鮮明にすべきである。では国立ブランドを一言で言い表す旗印とは何か。私は、数年前まで盛んに用いられた「政策医療」という概念は現在でも国立病院群の理念を的確に言い表したよい標語であり、皆を束ねるのに適した旗印であると考える。

第二は、国立病院群と一般病院の役割の切り分けをきっちり認識すべきである。国立病院群と一般病院の決定的な違いは、市場原理主義に立つか立たないかというところにある。現在多少行き過ぎかもしれない経営至上主義から少し離れ、国民を深い愛で結ぶ医療を求めなければならない。独法化したとはいえず国立ブランドである。国民にひとまず安心感

を与えるのが大きな役割である。今日の厳しい医療情勢の中で国立病院機構の病院群がなんとか留まっている。そういう姿が国民の目に安心感を与えるであろう。国立ブランドというものは、一国の中において国民の最後の砦^{とりで}であるからである。

第三に、国の根幹を揺るがす事態に対しての備えを固めていただきたい。そして従来から不得手であった機動力と迅速性を磨いてほしい。たとえば、今回のような新型インフルエンザの流行に際しては、全国の国立病院機構の病院が真っ先に受け入れを表明できたとすれば、どれだけ国民が安心し、また、周辺の医療機関も大いに感謝し、国立病院群への理解も高まることであろうことか。そのための準備と施設整備への投資は遠慮することなく、迅速果敢に実施すべきである。

最後に、小さき者、見えない者に対する温かい配

慮や情熱を絶やさないこと。そしていつでも最新の医療レベルが維持されているよう、スタッフ一同が切磋琢磨すること。そういった姿にこそ国立ブランドとしていつの時代にも変わらぬ役割があると信じる。

100年に1度の国家存亡の危機といわれるこの時期であればこそ国立病院機構に属する病院の存立理由が外に見えてこなければならぬ。三才「天・地・人」、その要は「愛」、その「愛」を掲げて戦国を駆け抜けた直江兼統が祈った人々の幸福、その思いは国立病院機構の医療人が国民に注ぐ熱意とは同根のものであるはずである。

雑誌「医療」は国立医療学会の機関誌である。その門戸は広く国民に開かれていなければならない。本誌は会員の発表の場であると同時に広く国民にメッセージを伝えるツールである。